

## ひとり遊び

万愚節の月、新型コロナウイルス危機の、渦の、その傍らで

桑原喜一

練習問題 1

微熱は、つづく

練習問題 2

渦に、巻き込まれて

日々、愚人節

\* 練習問題 1 \*

5 W 2 H

いつか When

どこでか Where

誰がか Who

どんな目的か Why

何をか What

どのようにか How

どのくらいか How many

初期設定

二〇一九年十二月末

武漢(たぶん)

武漢の眼科医(感染し、二月初旬、死亡)

注意喚起

新型コロナウイルス(SARSに似た症状)の発生

SNS「微博」にて情報の提示

不明(拡散阻止。及び、医師八人の一時身柄拘束)

\*

症例 a

発熱

鼻水

咳

痰の絡み

下痢

息苦しさ

全身のだるさ

耐えがたい頭痛

(いくつかが、数日間続く)

重篤、

高齢者に多い

基礎疾患のある者に多い

男性に多い

(短時日に死に至る者あり)

無発症者、

若者に多い

(とされている)

症例 b

味を感じない

臭いを感じない

(若者に多いらしい)

症例 c

PCR検査(核酸増幅法)において

陽性から

治療後に 陰性と

判定されても、

再び

陽性反応が出る者もいる。

(検体採取、感度・精度に、問題ありか)

症例 d

発症は 感染後  
二週の間ほど、で  
感染力を持つのは  
発症後、  
とされていた、が  
濃厚接触の定義は  
発症二日前から と  
しばらくして、  
修正される。  
今や  
未発症者も  
感染力を持つ、  
と される。

症例 e

軽度感染者も  
急変し、  
(免疫暴走により、なのか)  
死に至る。  
また  
自室、路上、他、での  
急死者の  
感染、判明あり。

症状 (まとめ)

感染者の症状は  
老若男女  
それぞれにおいて、  
ある傾向を持つにしても、  
どう見ても

その あらわれは、  
素人目には  
ランダム  
という他はない。

症例（追加）

「米国ニューヨーク州で、飼いネコ2匹が  
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の  
ウイルス検査に陽性反応を示したと、

4月22日に米疾病対策センター（CDC）が発表した」

「30代から40代で軽症か無症状の

新型コロナウイルス患者が

脳梗塞を起こすという症例が相次いでいる」

（アメリカ発 2020.4.28）

「一ヶ月前から川崎病に似た

症状の子どもたちが増えていた。

そのうち幾人かは COVID-19 陽性だった」

（フランス発 2020.4.29）

\*

危機

生活基盤の衰退

経済活動の遅滞

介護・医療システムの崩壊

疑心暗鬼の横行。

社会システム全般の

深刻な、

混乱

疲弊

破綻。

紙風船に幽閉されたような

人心の

ときに

惑乱、

ときに

狂騒。

余談にして、余波

「飯論法」を

かるがる 跳び越えて、

舌先三寸、舌、二枚

(超絶技巧でも、何でもなくて)

「募ってはいるが募集してはいない」に

負けず劣らずの、

朝、三枚 なのか

暮、四枚 なのか

その選択は 許さず、

(人並みの 惑乱、なのか

ただの 悪癖、なのか)

洗濯は可、が ウリ の

「布マスク二枚配付」にまつわる

呆れるほどの

あれこれ(1)は

耳目をひくための

政策の

あれこれ(2)が、

そこを経過して流れ出す

「改憲第一」の

ひ弱な 足腰の

つまりは 政治の

哀れで

独り善がりな姿を、

自ずと

常にも増して  
浮かびあがらせている。  
禍福とはいえ  
釣り合いの取れぬ  
コロナ禍の、  
この国における  
悲しいほどに  
愚かしくて  
哀れな 成果の一つ。

口直し  
とは言え、  
迎え酒のような  
余波。

〈追加四例〉  
「成長経済」の、炙り出し  
チューリップの花茎、首切り  
藤棚の花房、撫で斬り  
発生源追及、思惑的批難応酬、再々

〈プラス4〉  
入学式九月、案  
路上、マスク売り出現  
見せしめ、「正義」の貼り紙  
好機到来、便乗コロナ改憲、類々

(1) 当初予算「全世界への布マスク配布の関連経費、488億円」なり。後日(21日)、マスクの「受注先は三社、契約金額は計約866億円」。配布されたマスクの一部に、汚れの付着・黄ばみなどの変色や髪の毛の混入・虫の混入、発覚。更に、発注先は他に一社あるもなぜか名は公表されていないらしい。お祖末で、憶測を誘発する、公表の仕方にして内容。27日、一社増の、二社名の公表。契約金額訂正の、有無は不明。後日談は、まだまだ、続きそう。

(2) 「条件付き、三十万円給付」を反故にし、連立からの離脱を匂わせる「一律十万円」を受け入れ、補正予算の組み直し。悪代官風ナンバー2は「手を挙げた者に」と、言う。三分の二を大きく越える「数」を堅持し続けたいと思惑が、ここにも、露わだ。呪われているらしい五輪なのに、獲得した「延期一年」も、背景は同じだろう。

疑念、ただの憶測か

「電子顕微鏡でしか

見ることのできない

極小の粒子」

「生物と無生物の

あいだに漂う

奇妙な存在」(3)

〈細胞がなく

遺伝子を持つが

エネルギーを作れず

寄生しなければ増殖できない

ウイルス粒子〉(4)という、

「新型」の出現を

自然発生と見做して

よい、のだろうか。

ランダムに見えてしまう

発症の、姿は

「ずる賢い」と形容される、

新型ウイルスの

自然そのままの

姿なのだろうか。

個々の宿主の遺伝子によって

自ら変異し

発症の形を変えるのだろうか、

変異を被るほどに

もともとが

不安定なのだろうか、

淘汰の

途中なのだろうか。  
あるいは、  
ランダムに見えてしまうだけで  
一様な 発症の姿が、  
やがては  
整然と  
解析される(5)ののだろうか。

それでも、  
門外漢故の  
疑念は  
消えない。

巧妙に  
加工の痕跡は消され  
一つ一つの 発症の姿には、  
解析を逃れ続けるための  
プログラムが  
人為的に 組み込まれている、  
と 言えるのだろうか。  
そこまで至り得る技術を  
獲得しているのだろうか。

(3) 「高等生物が登場したあと、初めてウイルスは現れた。高等生物の遺伝子の一部が、外部に飛び出したものとして」ウイルスはもともと私たちのものだった「親から子に遺伝する情報は垂直方向にしか伝わらない。」しかしウイルスのような存在があれば、情報は水平方向に、場合によっては種を超えてさえ伝達しうる。「ときにウイルスが病気を死をもたらす……。病気は免疫システムの動的平衡を揺らし、新しい平衡状態を求めらるることに役立つ」  
(朝日新聞「福岡伸一の動的平衡」2020.4.3)

(4) 「ウイルス粒子とは、たんぱく質でできた殻とその中におさまっている遺伝情報だ。遺伝情報を担う物質の種類により、DNAウイルス、RNAウイルスに分けられる」「ウイルスはしばしば宿主に遺伝子を渡しているが、多くの場合、宿主には何も起こらない」  
「おそらく病気を起こすウイルスは1%、99%は病気を起こさない。宿主を殺すと、自分の居場所がなくなる。賢い戦略は共生だ」  
(朝日新聞「ウイルス共生の歴史」2020.4.6)



(5) 「遺伝子変異を調べることにより、世界中のウイルスのファミリーヒストリーを推測することが出来る。  
……報告された……ウイルス遺伝子解析の結果を比較した。……A、B、Cの3型に大別することが出来た」  
「A型はコウモリのコロナウイルスに一番近い」「B型は、A型と比べて2か所の配列の違いが特徴」  
「C型では、B型からの1か所の遺伝子変異が共通してみられる。ヨーロッパで多くみられ、中国からは報告されていない」  
(山中伸弥による新型コロナウイルス情報発信・科学論文で学ぶ「ウイルスの特性」)

\*

感染確認の数値

発表される

日々の

新たな、

感染確認者と死者の数

経路確認者と不明者の数、

PCR (ポリメラーゼ連鎖反応) 検査に

辿り着くのは

およそ5%

らしいから、

検査人数が微増、に

とどまり続けるなら

十才ごとの

実施したPCR検査数

(延べ人数ではない数)

陽性者率

重症者率

死者数

再(々)陽性者数

各地域 それぞれ

及び 全体を

男女別の数値にして、

毎日発表する必要はないにしても

日曜日を中間に挟んだ

一週(なり)、二週(ご)ごとの

数値表なり  
グラフなりは、  
その意思があるなら  
集計し 作成し  
簡略化し、  
公表するのは  
容易い、はずだ。  
(そんな資料は手元に山積みだ、  
と 苛立つ 罵声が  
聞こえてくる のを  
ひそかに期待してはいる、が)

公表 していないのは  
なぜだろう、  
どのような 事情や  
方針によるのだろう、  
おおよその 実態が  
憶測を避けて  
推測できる、だろうに。  
(誤解と混乱を増幅するだけ、と  
見縊っているのかも、知れない)

\* 微熱は、つづく \*

保健所に電話する／魔都に見えてしまう／少しばかり警戒する  
肺膿瘍と呼ぶものか／ツマミ二個を買う／追い越しつつあるのか

三月下旬 風邪気味、  
体温を測ると、37.5度前後  
翌日の夜、38.5度の発熱  
次の日の午前、37.5度前後  
単発的な咳、あり。  
掛かり付けの診療所に 電話し

次に、保健センターに相談する。

一年近く前の外科手術を伝え、

担当者からは、

二週間ほどの生活（東京に出掛けたか、等）

現在の体調を訊かれ、

〈コロナウイルスの疑いは薄い

市販の風邪薬か近くの病院で

と なるが

時節柄、電話するも

近くの病院での

〈発熱ゆえの受診〉は

受け付けてもらえない。

翌日の 頭部MRA検査を

慌ただしくキャンセルする。

翌日 金曜日、内科を受診する。

容態の経過

〈深呼吸をすると右肋骨の

下あたりに痛みがある、等〉を話す。

指先で 血液中の酸素量を測る、

97.5という 数値。

インフルエンザ検査、陰性。

X線撮影、右下にカゲ有り。

血液検査、炎症反応有り。

〈肺炎〉との診断、

抗生物質（5日分）

解熱剤（10回分）の処方。

次週の月曜日には、

経過観察を控えている。

夜、新たに開設されているメールから

問い合わせをする。

一時間程して電話あり、

土・日の食事制限

〈重湯・ゼリー・味噌汁（豆腐のみ等）は  
予定通り。

月曜の朝、病院よりの電話連絡にて  
実施するか否かを決定する。

月曜日、朝

37度の微熱、確認

血液・CT検査は 一週間先延ばし

胃管の内視鏡検査は 後日（未定）、  
ということになる。

\*

ひそかに、思う

真密・口密・意密ならぬ

三密、

密接・密集・密閉とは、

まるで無縁な

山間地

運び屋になるのは避けたい、

（という 心の働きには

ガスにまかれた

狭い稜線に行くような

危うい因子も潜んでいる、が）

高齢者率 七割ほどの

地勢的にも 隔離されて

住まう地からは

首都は、魔都に見えてしまう。

四月、第一月曜日

いずれも始発駅からの  
車両に乗る。

二時5分発

りようもう 22号

∞号車には、途中より三人ほど  
浅草駅下車 二人ほど。  
銀座線一車両、  
五〜六人。  
ゆりかもめ には  
先頭車両  
最前列左の  
一人掛け、  
港湾都市の姿がよく見える。  
二駅目あたりで  
右の二人掛けに  
米国人らしき  
小太り気味 と  
やや 細身  
娘ふたりが坐り、  
やや抑えがちに  
お喋りしながら  
スマホで  
進行方向の 景色を 撮り始める。  
これは密接に近い と  
少しばかり 警戒する。  
十代後半らしき  
二人は 有明の  
二駅手前ほどで 下車。  
物珍しそうに  
最前列に坐し  
燥いではないものの、  
展開する景色に  
目を凝らす  
子供のような振る舞いの、  
マスクなしの娘ふたり  
と  
バッグを抱え

メガネにマスクの  
老人ひとり、  
この組み合わせは  
些かなりとも  
珍奇。

\*

昼食は 抜き。  
病院は いつもの  
四割ほどの人、  
血液検査の受付番号も  
半数以下。  
CT検査は  
ほぼ 予約時間通り。  
夜食と朝食を  
コンビニにて 調達し、  
ホテル泊。  
火曜日、問診は  
予約時間の  
二十五分ほど前に始まる。  
CT画像から  
〈右乳首の下辺りに、  
炎症を起こし  
壊死した細胞が膿となり  
カゲとなって映っている  
(肺膿瘍と呼ぶものか)  
夕刻よりの微熱はこれによる  
と 思われる、  
自然に治るほどのもの。  
血液検査の炎症反応も  
ほぼ心配ない値〉  
抗生物質七分を加えて、

薬三種が処方される。

午前の受診に間に合いそう、

淡路町の耳鼻科に寄る。

入り口には

臨時の警備担当らしい

若い男 二人、

看護師さんも二人いて

体調の確認をする。

腋の下に

体温計を挟みつつ

ここ二週間ほどの経緯を

簡略化して伝える。

受付可否の確認連絡を取り、

許可されると、

二階 待合室の

人数は かなり少ない。

程なく 問診を受け

いつもの薬三種が処方される。

中央通りの人出は

七割 前後だろうか、

末広町駅まで歩く。

途中 ラジオデパートに寄り、

小型ポリウム用

軸穴 3ミリのツمامミ

二個を買う。

浅草発 12時50分に、

乗る。

昼食は

飲み物と

残り物のパン、

カロリーメイトで済ませる。

この二日間、

意識して  
物に触れることを避ける。  
触った場合は、  
除菌ウエットティッシュで  
手指を拭う。

\*

その後

二週間余が過ぎた。  
深呼吸時の痛みは消えているも  
時折の微熱は消えてはいない。  
病が  
老を  
追い越しつつある、のか。

\* 練習問題 2 \*

5 W 2 H

どこで？  
誰が？  
いつ？  
どんな目的で？  
何を？  
どのように？  
どのくらい？

再設定 A

武漢華南海鮮卸売市場（？）  
特定不可（出入りする人）  
二〇一九年十二月頃／以前  
搬入する／仕入れる／売り捌く／食材を求める



野生動物（センザンコウ？）  
売り買い等の手渡し

不明（商売・食生活に必要なくらい）

再設定 B

中国科学院武漢ウイルス研究所（？）  
関係者／他国の組織（？）

二〇一九年十二月頃／以前

不明（検体採取・保管、ゲノム解析 等）

蝙蝠に由来するウイルス

不明（偶発的／意図的／戦略的）

不明（解き放たれば、限りなく拡散、増殖）

\*

ネット上の

波乗り遊び は

最小限にする、

憶測

中傷

過激

罵倒

思惑

の 連鎖は

垂れ流されるから。

しかし

それでも、

「新型」とされる

コロナウイルスは

人為的(6)なものなのか

さらには

加工(7)されたものなのか、

疑念は

残る。

(6) 「タウベンバーガー博士の研究チームは、1988年にスペイン風邪で死亡し、アラスカの永久凍土に埋葬されていた女性から取り出したゲノム情報を解析した。解析された情報は……研究者たちに提供され、……リバー・ス・ジェネティクスという技法を用いて、解析された遺伝情報を元にプラスミドと呼ばれる微小遺伝物質を作成した。その後プラスミドは……米疾病管理センター(CDC)に送られ、ヒトの腎細胞に注入された。これで、ウイルスは再現された」  
(AP通信 2005.10.7)

「本研究チームは、……遺伝子を、公表された遺伝子配列から再構築し、……1918年のウイルスを人工合成しました。このスペイン風邪ウイルスは、マカカ属のサルに強い致死性の肺炎を引き起こさせました。また、感染したサルは、ウイルスに対する自然免疫反応の調節に異常を起こしていることがわかりました」

(7) 「ある中国人研究者が、(世界初となるゲノム(遺伝子)編集ベビーを誕生させた)と主張している。この赤ちゃんは、二月に生まれた双子の女兒で、そのDNAの操作には、生命の設計図そのものを書きかえることができる、新しい強力なツールを用いたという」  
(Bluebacks Outreach 2018.12.7)

\* 渦に、巻き込まれて \*

触れることも

(接触感染なのに)

嗅ぐことも

味わうことも

(飛沫感染なのに)

見えることも

聞こえることも ない、

ウイルスは

捉えにくいから

喻えていえば、

パンデミックとは、

知らぬ間に 浸潤する

ツナミのようなもの、だろうか。

ツナミの

破壊の  
エネルギーの  
変奏として  
姿も見せず に  
極小の粒子に変じ、  
ヒトの細胞に入り込み  
ヒトの身体を植民地化し  
増殖し  
増殖し、  
新たに 培地を  
つくり  
つくり、  
時に  
強毒化し  
強毒化し過ぎては  
宿主と共に  
埋められ、  
焼かれる。  
変異しては 弱毒化し  
歩みの道を  
共生に シフトして、  
日和見の 粒子は  
姿を隠し、  
ほぼ 全地表を  
ヒトの身の丈ほどに  
ぼつり  
ぼつり と  
時に、爆発的に  
覆ってゆく。  
違いを探せば  
半日ほどで姿を隠す  
津波のように

限定的ではなく、  
瓦礫だらけの  
破壊の 爪跡 を  
数年に わたり  
地表に 残し、  
風景をガラリと変じる  
わけではない。  
飲み込まれ  
弄ばれ  
揉みくちやにされはしないが、  
いつの間にか  
ヒトの 居住地  
いたるところ  
世界中のあちこちで  
極小の粒子は  
ヒトの細胞に住みついて  
弱毒性を獲得しなければ、  
ヒトの  
身の丈ほどの  
周りに  
拡散し  
変異し、  
第二波  
第三波 と  
襲いかかり  
地表から  
多くの ヒトと 共に  
その姿を消してしまう。

\*

発端が  
どこであれ、

天災と人災は  
絡み合い

渾然一体となり、  
スパイラルは  
いつでも どこでも  
起こりうるから、

わたしは  
終息を 待ちつつ  
立ち止まり、  
ひとり 念ずる。  
再現ではない  
組換えではない  
加工ではない  
意図的でもない  
戦略的でもない  
と。

けれども  
念ずる力は  
弱い、から  
憶測は  
自戒を込めて  
せめて、  
ゴミ箱へ。

\*

保持しつつ、  
類推の種子  
恐怖の種子  
不安の種子  
は  
凍結し

ひとり  
想う。  
人類史の  
一齣として  
遠からず して  
あるいは  
数年後  
この災いが  
収束を迎えるとすれば、  
コロナウイルス禍の  
パンデミックの  
あらわれ は  
強毒性の  
気まぐれ と  
非情さ にあり、  
〈隔絶され続ける〉以外の  
ヒトの 対処法としては  
〈個として、免疫を獲得する〉  
〈個として、死に呑み込まれる〉  
〈類として、免疫を獲得し受け渡す〉  
そうして  
非情さとは  
ヒトが  
そう見做すだけのこと  
で、  
既存の治療薬を  
〈組み合わせで〉用いつつ  
「新型」に 有効らしき  
治療薬とワクチンを  
創り出し得て  
も、  
〈免疫〉の働きは 揺れつつ  
ワクチンと治療薬は

変異に 追いつかず  
終息の見通しも 立たず  
社会システムの  
崩壊の  
連鎖が止まらなるとすれば、  
ヒト も  
軸足を シフトし  
戦略として、  
〈隔絶し続けるための〉シエルターを  
密かに（既に、何処かに 隠され、  
造られてあるだろう、それを）  
代用し、  
余力があれば  
新たに  
建造し、  
〈密かに、選別し、收容する〉を  
選択し、  
これらが  
方舟になり得るとは思えない、から  
「新型」への対応策として  
一方で  
祈り、なのか  
ただの  
賭け、なのか  
あるいは  
淘汰、と するのか  
〈類として免疫を獲得し、受け渡す〉が  
策なき策 として  
（公表されはしないだろう、が）  
隠しようもなく  
政策の核として滲み出てくる、だろう。  
たまたま、

地勢的に  
隔離されている 場所での  
能天気で  
他人事のような  
言い回しだが、  
わたしは  
個、  
そのものだ。

\* 日々、愚人節 \*

河岸段丘の山裾（海拔三五〇Mほど）から、対岸の山並み（頂、八六〇M余）を眺めやる

四月の終わり  
ヒトは、  
ナノメートル単位の  
粒子(⑧)に  
心も  
身も 捕われ  
翻弄されているが、  
対岸の  
芽吹き  
色の  
濃淡は、  
ひと雨ごとに色あいをかえる。  
十倍ほどの  
双眼鏡のなかに浮かぶ、  
掘り取られず  
岩場に 生き残る  
アカヤシオの  
色濃い 花は  
姿を消し、  
あちらこちらと



遅速 まばらに

交配を繰り返しつつ

咲き誇る

山桜の花も

ほぼ 姿を消している。

122号線の

道路脇、

南面する

石垣の 上に

いちはやく

咲き始めていた

山吹も、

花の盛りを過ぎている。

やがて は

五月の

甘い、

香り。

両岸 の

斜面 に

追い遣られ

杉や 松に 絡みつき

咲き乱れる

ノダフジ の

淡く、

濃い、

紫。

河川敷に

咲き誇る

ニセアカシア の

やわらかい、

白。

荒れ果てた畑の

脇に

生き残っている

桐の木の

明るい、

紺。

なか空に 浮かぶ

花々、から

降りて 漂う

あまやかな

におい。

含みが多くて

小賢しい、

社会的距離 など

微塵も 要しない。

わたしは

「対人距離」(9)を

ひそかに

意識する、

けれども

人に会うことは 稀だ。

南面する 段丘の

端の 崖下を

渡良瀬川に 沿う

旧足尾線の鉄路は

視野には 入らない。

対岸には

山裾を取り囲み、

春先から

気ままに

花粉を、

煙のように

撒き散らす

杉の 青黒い 軍団、

谷筋を

雑兵のように

攻め登り

張り付いている、人工林。

所々 で

茶色く枯れた

赤松の 隊列。

それでも

段丘の 畑

尾根筋 の

新緑は、

堪えながらも

挟撃することなく

のびやかに

息づいている。

庭先では、

球状に咲き誇る

西洋シヤクナゲに

熊ん蜂が 潜り込み、

やや 淡い 紅や

ふくらかに 白い

花の

かたまりを

揺らし、

巢籠もりの

垂木の穴から、花

花から花へ と

飛び交っている。

余念なく

蜜を吸っている

オオスズメバチの  
虎縞模様の、お尻。  
「  
姿をみせ始めた  
ウスバシロチョウの  
おぼつかない、舞。  
下枝 を  
遊び渡る  
若い、  
ガビチョウたち の  
振る舞い の  
あいらしさ、  
その囀りは  
幼く  
今のところ  
騒がしいわけではない。

ひとり、  
愚人  
足腰 定まらず、  
四月は  
終わる。

(8) ウイルス粒子の直径は、およそ100〜200ナノメートル(㎍)で、100㎍は一万分の一ミリらしい。換算したところ、感覚の域外にある。

(9) 「社会的距離」では、俯瞰的過ぎる。「物理的距離(の保持)」としても、「対物」を連想しがち。親疎の別もなく、相互的な、個と個の空間的隔たりだから、「対人距離」の方が、実感的で、しっくりする。「相互距離」としても、よいだろう。いずれであれ、警戒・嫌悪・忌避・偏見という細菌擬きは、ウイルスにまして、常に、ヒトの心を住み処とする。それらが「正義」と結びつくと、「新型」に煽られ、共振し、さらなる強毒化(中傷・差別・排除・分断・敵意・断罪)が進む。「微熱は、つづく」の(狭い稜線)とは、それら、細菌類の連なりからなっている。強毒化したウイルスは、濃霧、とも比し得る。